阿英著・作家出版社版『晩清小説史』の改稿

中　島　利　郎

On the Unfinished Third Edition of "Wanqing-Xiaoshuoshi" by A-Yin

Toshio Nakajima

Summary

A-Yin's original "Wanqing-Xiaoshuoshi" was published by in May, 1937. In August, 1955 after the establishment of The People's Republic of China, the revised edition was issued with modifications and supplements along the lines of the new governmental policy. However, A-Yin still seems to have been dissatisfied with the contents. He began further revisions but unfortunately passed away leaving the third edition unfinished. In this study, the author investigates how A-Yin intended to modify the second edition by examining his posthumous works.

Received Oct. 22, 1990

Key Words : Wanqing-xiao shuo（晩清小説）

一

1937年５月，阿英著『晩清小説史』（全十四章）は上海・商務印書館から出版された。いわゆる初版本『晩清小説史』である（以下，「初版」という）。その後，中華人民共和国成立後の1955年８月，改訂版『晩清小説史』が北京・作家出版社から出版された（以下「改訂版」という）。「初版本」から「改訂版」への改刪増補は毎頁数百ケ所に及び，また改刪増補のしかたも多岐にわたっているが，概ねほぼ次のような四点で行われたといえる。

(1) 論旨に直接あるいはそれほど影響を及ぼさない字句の改刪増補。
(2) 誤りの訂正。
(3) 新出資料などによる改訂。

(4)　中華人民共和国成立以後の政治的配慮や作品に対する歴史的評価の変化による改訂や削除。

(1)～(3)までの改訂についてはそれほど大幅な改刪増補はなく，阿英の晩清小説評価に対する論旨は，「初版」に比べてさしたる変化はない。

しかし，(4)に関しては大幅な改刪増補が行われた，というよりは，むしろこの点を改めるべくこの「改訂版」が出版されたのである。したがって，阿英の当該作品に対する観点も「初版」に比して著しく変化している。たとえば，1954年末から55年にかけて展開された「胡適批判」を背景に，「初版」にたびたび引用されている胡適の晩清小説評価に対する阿英の見方は，当然「改訂版」ではいっそう厳しいものに変っているし（第一，十一章等），晩清期の翻訳小説に対して魯迅とともに功績のあった「周作人」は，全面的に削除されてその名前さえ見当らなくなってしまった（第十四章）。さらに晩清の四大作家の一人劉鶚の「老残游記」については，「初版」で阿英は，この作品に登場する璵姑と逸雲という超現実的な女性に作者劉鶚の理想が仮託されている等，との興味深い解釈を八百字余りを費やして述べているが，この超現実的な女性たちを通しての「老残遊記」解釈は，当時の基本的な文芸政策である「社会主義リアリズム」と抵触すると考えたのか，「改訂版」ではすべて削除している，等である[1]。

以上のように，阿英は『晩清小説史』をその当時の政治の流れに合せて（勿論，阿英自身の考え方そのものにも変化はあったのではあろうが），改訂を加えた。しかし，阿英は，その改訂にまだ不満（あるいは不安）があったようだ。そこで，引続き「改訂版」の改稿を行い，「《晩清小説史》改稿的一節」との副題をつけて，部分的にではあるが以下のように発表した。

A．「関於“二十年目睹之怪現状”」（1957．1『文芸学習』34）
B．「関於《老残游記》」（1962．8『文芸評論』1962－4）
C．「関於《官場現形記》」（初出誌不明）

（以下，各論はA，B，Cと略記する）

AおよびBは『晩清小説史』「第二章　晩清社会概観（上）」中の「呉趼人及其二十年目睹之怪現状」，「劉鶚及其老残遊記」の項の改稿，Cは「第十一章　李伯元官場現形記」の項の改稿である。以上の三篇はともに阿英の死後に出版された『小説三談』（1979．8上海古籍出版社）に収められたが，それによるとこれら三篇の執筆時期は，Aは1956年，BおよびCは1955年である。とすれば，阿英は，作家出版社から「改訂版」を出版するのとほぼ同時に，さらに「改訂版」の改稿に着手したことになる。なぜそのように慌ただしく改稿しなければならなかったのか。以下，本稿においてはその改稿が「改訂版」と比較して，どのように変化したのか，そして，その変化は何に起因するのか，検討してみたい[2]。

二

先ず，以上の改稿三篇と「改訂版」との内容について比較してみると，「《晩清小説史》改稿的一節」と副題をつけているものの三篇ともに全面的な書き換えといってよい。つまり「初版」と「改訂版」を比較した場合，先に述べたように「改訂版」ではかなりの改刪増補が行われたが，基本的には「初版」の文章や論旨の組み立てはそのまま踏襲しているのに，これら改稿三篇はその点では「改訂版」と対応する箇所が大幅に変更されており，ほとんど新たに稿を起こしたといってよい。以下，このことを前提に改稿諸論と「改訂版」との主なる相違を見ていくことにする。

Aについてみれば，先ず冒頭で「二十年目睹之怪現状」（以下，「怪現状」と略記）の意義を「在一定限度上，反映了腐朽的封建統治与半殖民地国家所特有的生活堕落与道徳敗壊的現象」と規定している。このような冒頭での作品に対する規定は「改訂版」には見られない。いま先ず，Aおよび「改訂版」の記述内容の大概を一覧し比較してみる。以下，左がAの記述内容，右がそれに対応させた「改訂版」，（　）内は記述のおおよその字数で，＋の前は原文引用を含んだ阿英の記述，後は改行引用部分で後者の字数は前者には含まれていない。

改稿　A	「改訂版」
1．「怪現状」の意義（150）	なし
2．呉趼人紹介（460）	（340）
3．主人公九死一生（240＋120）	（260＋120）
4．魯迅の評価（290）	（280）
5．李懐霜の呉趼人伝（260）	（340）
6．腐敗統治者階級の暴露（950＋266）	（230）
7．知識階級の描写（700）	（760＋1050）
8．洋奴，買弁の描写（250）	なし
9．「我仏山人札記小説」（170＋300）	なし
10．蔣瑞藻「小説考証」（240）	（220）

以上の対比をみてわかるように，改稿三篇の中でAと「改訂版」とは比較的対応している。しかし，その内容はかなり変化しているのである。まず第一に気がつくのは，上記A－7「知識階級の描写」について。「改訂版」において阿英は，「怪現状」第三十五回より，当時の上海租界に巣づくった似而非名士たちの醜態をかなりの部分にわたって引用し，そこに見える呉趼人の描写の誇張化と戯画化について「呉趼人的優點與缺點，在這一段裏，很可以看得明白」としながらも，その描写を「～在寫當時的洋場才子上，確是成功，雖溢惡違眞，不免成

為闕典」と認めている。また，その引用中の似而非名士たちと対峙的な人物としての蔡侶笙については「呉趼人寫他的正直，拘謹，活畫出一個舊時代的典型人物來」と評し，主人公九死一生についても「卻加了任俠好義成分，性格寫的特別顯明」と評する。そして，これら両者を合せた知識階級に対する描写が「怪現状」の特に優れた点で，阿英自身「怪現状有超過文明小史，官場現形記的優點，那優點，就在智識階級的描寫上」と評価した。これが「改訂版」における「怪現状」評価の主眼であった。

ところが，Aにおいては，知識階級描写に対する評価にはそれほど力点は置かれず，先に述べた「腐朽的封建統治」と「生活堕落与道徳敗壊的現象」が「怪現状」の中でいかに活写されたか，また「怪現状」以外でも呉趼人はこれらの現象をどのように描き且つ考えていたかに視点は変化している。たとえば，Aにおいては「改訂版」の似而非名士たちの引用部分をすべて削除し，代って「怪現状」第八十三および八十四回から，中日甲午戦争の際自己保身のため戦わずして平壌からの撤退を進言する陸観察や，台湾一省を日本に譲ったのだから盧山の牯牛嶺などは外国人に売り渡してもよいとする総理衙門のある大臣の話を引用し「従各方面説明了這様腐敗政府，不可能抵抗『狠毒的』帝国主義侵略」と強調しており，これがAにおける阿英の「怪現状」評価における主眼となった。つまり，主眼がA－7ではなく，A－6「腐敗統治者階級」の暴露に移ったことになる。もっともA－7もまったく削除されたわけではない。新たに書き加えられたA－8「洋奴，買弁の描写」とともに，「生活堕落与道徳敗壊的現象」面の形容として記述されているが，しかし，何分にも千字余りの「怪現状」からの引用を削除してしまったので，読者に与えるインパクトが弱くなったことは否めない。

次に，「改訂版」と大きく異なるのは，呉趼人を「愛国主義精神」をもつ作家として強調している点である。上にみたようにAおける阿英の「怪現状」に対する主眼は，売国思想をもった清朝統治階級の腐敗ぶりを暴露的に描いた小説というように変化した。ゆえに，かれらを指弾した呉趼人は「愛国主義精神」を具現した作家であるというのである[3]。さらに，阿英はA－9「我仏山人札記小説」の中の「捏粉人道」から，街の粘土細工師が子供に，インド人の警官が乞食を殴っているところを作れといわれ，乞食といえども中国人，同国人の醜態を描き，外国人の威風に加担することはできないとことわった話を引き，この点を強調している。また，「改訂版」では呉趼人の別の小説「痛史」を「痛史亦不弱，惜未完」と評していたが，A－2の末尾では「以《痛史》最富有愛国主義思想」といいかえ，A－9でも呉趼人の「愛国主義精神」は「《二十年目睹之怪現状》和没有写完的《痛史》，表現得尤為突出」と述べている。

以上のように「改訂版」とAとを比較すると，阿英の「怪現状」評価は，「知識階級の描写」から「腐朽した封建統治階級の暴露」および呉趼人の「愛国主義精神」へと変っていったことがわかる。

なお，「改訂版」の「知識階級の描写」の始めにあった「胡適從形式主義論斷，稱二十年目

睹之怪現状：『還是儒林外史的産兒』。就内容而言，二十年目睹之怪現状也實在是包含了一部新儒林外史」という部分は，Aではすべて削除されている。

Bの「老残遊記」について，阿英は「改訂版」を全面的に書き換えている。「改訂版」における阿英の「老残遊記」評価は，次の一文に代表される。

（劉鶚）很相信科學，認為祇有提倡科學，興辦實業，可以救垂亡的局面。這一種科學精神，當然會反映到他小説的描寫上，這就形成了老残遊記在藝術上的價値，所謂科學的寫實。如寫黄河敲冰，王小玉唱大鼓，大明湖紀遊，都是極出色的文字，而以王小玉唱大鼓一段為最優秀：

そして，「老残遊記」第二回から「王小玉唱大鼓」の場面を一千字余りにわたって引用し，さらに次のような胡適の「老残遊記」評を引用して，自己の評価の裏付けとしている。

胡適論老殘遊記道「老殘遊記最擅長的是描寫的技術：無論寫人寫景，作者都不肯用套語爛調，總想鎔鑄新詞，作實地的描寫。在這一點上，這部書可算是前無古人了。」胡適論小説，時有錯誤，但對老殘遊記的這一方面的評語，基本上還是洽當的。

この外にも「老残遊記」の特色ともされる官僚批判，いわゆる「清官之可恨遠甚於貪官」についても些か言及するが，それほど深く論じているわけではなく，以上に掲げた点が「改訂版」の過半を占めている。したがって「改訂版」における阿英の「老残遊記」評価は，集約していえば「劉鶚の科学的精神は当然彼の小説描写の上にも反映されており，これが『老残遊記』の芸術的価値，所謂科学的写実を形成している」という点にあったといえる。

これに対してBの「老残遊記」評価は，要約すれば次のようになる。

「老残遊記」には，三つの重要な点（「三个主要環節」）がある。第一は清官（＝酷吏）についての暴露である。玉賢，剛弼の二人はいわゆるワイロをとらぬ清官である。彼らが事件を処理する場合，事実を精査せずに自分の判断で気儘に処理する。ワイロをとらぬ清官という立場から彼らの処置はたいへん厳しく，立枷で死んだ人が二千人といわれる。このような悲劇は彼らが主観主義で，勝手に事を処理するから起こるのである。第二は清官だが酷吏ではない，しかし世故に通じない君子荘宮保が人民に災難を齊すことを暴露する点である。彼は「老残遊記」中では最も好ましい官吏なのであるが，簡単にある観察の建議を信じて賈譲の「治河策」という古い方法を用い，実情を考えずに黄河の治水工事をした。ただこの一回の無鉄砲な行動で，なんと数十万が殺されたのだ。それなのに得得と「賈譲は二千年後に一知己を得た」とか「功名は竹帛に垂れ万世不朽である」と自画自賛する。これもまた主観的願望のみにたよって客観的実情を調べるような人物でなかったからである[4)]。

以上の二種類の官吏の行動について，阿英は玉賢と剛弼に対して「只是主観主義，剛愎自用」「他的剛愎更清晰的説明了主観主義的遺毒」「主観，濫施刑罰，草菅人名」と述べ，荘宮保に対しても「還是只憑主観願望，不研究客観実際情況的人」というように述べて，彼らの及ぼす災難がすべて彼らの「主観主義」から出ていることを繰り返し非難した後，「這也就説明了≪老残遊記≫所具有的現実意義。特別是主観主義的遺禍無窮，是値得我們深刻引為訓誡的」と結論づけている。

さて第三に阿英が指摘する「主要環節」は，「老残遊記」第八回末から第十一回にわたって語られる神秘的な娘，璵姑と申子平及び黄龍子の問答についてである。阿英はいう。

作者在這里，首先創造了一个具有「林下風範」，不為旧礼教束縛的超塵脱俗人物——璵姑。她能以深夜和男子対座論道，握着対方手，問道：「請問先生，這个時候，比你少年在書房里，貴業師握住你手『撲作教刑』的時候如何？……你此刻愛我的心比愛貴業師如何？」来考験対方対「道」的理解。她痛論三教同軌，大胆批評宋儒理学，尤詆清儒：「宋儒固多不是，然尚有是処；若今之学宋儒者，直郷愿而已」由此帯一个黄龍子，従≪易経≫一直談判「北拳南革」，汚蔑義和団和革命党，説他們「破敗了天理国法人情」，警告：「若遇此等人，敬而遠之，以免殺身之禍！」～

そして，阿英は第一及び第二の「主要環節」と，この第三とを比較して次のように結論する。

這様空想的境界，与其他両个環節里的両个現実境界是完全不能調和的。這様反対革命的企図，与其掲露的現実要求也是矛盾的。現実使読者認識這種「老新党」的忠清室的反動本質，只能反映其心労日拙而已。這其毒草的部分。不但破壊了全書現実性的完整，也貶低了全書的価値。

阿英は商務印「初版」において，上記の第三の「主要環節」について，次のように記している。

劉鐵雲這人不僅疏放，也很羅曼諦克，因此，無論在什麼時間，他都是把「眞實的自己」，和「理想的自己」並存的。前後集有了老殘，就再有了璵姑和逸雲，老殘是代表了人間性較強的人，璵姑逸雲卻是他的超現實的理想，一種空想的人生觀與世界觀的創造。由此可以知道有科學頭脳的劉鐵雲，為什麼在寫實性很强的老殘遊記中，加上這様兩個架空的人物。～（中略）～大概因為終於是一個思想，而不能和人間切斷吧。對於存在的人世，便依舊不能不有許多的牢騒與不滿。從逸雲的談話裏，能以看到當時的官吏是如何的横行，也可以了解得人間世是如何的醜惡。並没有決然的和人世分開，讀者感到與這個人物皮肉相關，這人物創造得不失敗在此，

作者的成功也就在此。

そして，阿英は「改訂版」出版に際しては，これらの部分をことごとく削除し，次いで改稿Bにおいては再び言及はするものの，「毒草」と罵倒するまでに変化しているのである。

なお，BもA同様「改訂版」にあった胡適の「老残遊記」言及部分は削除され，「改訂版」にはまったくなかった魯迅の「中国小説史略」からの引用が眼につく。

最後にCについて見よう。CはA，Bとはまた異なった組立で改稿されている。Cは三つの部分からなる。

第一の部分は，胡適の譴責小説についての見方に対する批判である。胡適に関する記述は上に記したように「改訂版」にはあったが，改稿AおよびBを書くにあたって阿英は尽く削除した。CではA，Bと異なり，前面的に「胡適批判」を展開している。阿英はまず冒頭，魯迅の「中国小説史略」中の「譴責小説」に関した部分を引用した後に，それに対照させて胡適の「官場現形記叙」から次の一節を引く。

近世做譴責小説的人大都是失意的文人，在困窮乏中，借罵人為糊口的方法。他們所譴責的往往是当時公認的罪悪，正不用什麼深刻的観察与高脱的見解，只要有淋漓的刻画，過度的形容，便可以博一般人的歓迎了。故近世的譴責小説的意境都不高。

これを阿英は以下のように厳しい口調で批判する。

～不但説明了胡適的唯心観点，也説明了他対文学的無知。主観的肯定譴責小説的作者是『失意文人』，『罵人糊口』，而不就作品的本身論断，這完全是十足的流氓無可理講的口吻。芸術是社会現実的反映，又為什麼『当時公認的罪悪』就不能譴責？～

そして次に，胡適の「更醜悪」な点として同じ「叙」の最後の部分を引用する。

～故譴責小説雖有浅薄，暴露，溢悪種種短処，然他們確能表示当日社会的反省的態度。這種態度是社会改革的先声。～但中国人終是一个誇大狂的民族，反省的心理不久就被誇大狂的心理赶跑了。到了今日，人人専会責人而不肯責己，把一切罪状都堆在洋鬼子肩上，一面自己誇張中国的精神文明，礼儀名教，一面罵人家都是資本主義，帝国主義，物質文明！～

阿英は胡適のこのような見解について，更に指弾の口調を強めて次のように批判する。

這篇叙言，是胡適在一九二七年末写的，很顕然是『有的放矢』。他有意的抹煞掉譴責小説里

的反帝国主義成份，硬把『揭露』与『反対』，曲解為『社会的反省』。最后，図窮而匕首，更把帝国主義奴才的真面目徹底張開，責備中国是『誇大狂的民族』，不応該反対『資本主義』，『帝国主義』。～

第二の部分は，「官場現形記」の作者李伯元の紹介で，呉趼人の李伯元伝を借りてその経歴を紹介し，李伯元を「晩清譴責小説最富有代表性的作家」と述べて，続く第三部分で「官場現形記」の分析に入るのである。この第一と第二の部分を合せると，ほぼC全体の半分ほどになる。

第三の「官場現形記」についての記述は，かなりの改刪が行われているが，それはほぼ「改訂版」の記述に従って行われている。ただ「改訂版」では阿英は，李伯元は人物描写においては小官僚や佐雑についての描写が見事で，「從他們個人，一直寫到過程，寫到他們的際遇和社會關係。能寫到李伯元這樣深刻的，在當時没有第二個人」と絶賛していたが，その部分がいささか影をひそめ，かわって外国人を恐れ，それに媚びる制台の話柄を第五十三回から引用し，高級官吏の腐敗ぶりを強調している点が眼につく。つまり，「官場現形記」の価値を，その描写力よりも官僚批判に移したのである。それはCの結論部分に以下に引くようにもっともよく現れており，「官場現形記」を譴責小説の最高の作品と位置づけている。

～尽管≪官場現形記≫在認識上（跳不出『老新党』的範疇），技巧上存在着缺点，但在当時所起的影響，無論是在政治上抑文学上，還是很大的。揭露了封建統治的腐朽，揭露了帝国主義的陰謀，也鞭撻了社会許多不合理現象，反対科挙制度等等，從而提高了中国人民的覚悟。就由于這部小説的誕生，与時勢的要求，逐漸形成了晩清譴責小説的高潮，在相当深度上反映了当時社会的現実：『山雨欲来風満楼』的革命前夜現実。是譴責小説中的典範之作。

三

さて，以上のように「改訂版」と改稿三篇をそれぞれ比較して先ず感じることは，以下の点である。阿英は，「改訂版」（「初版」でも同様だが）において，原作者たちの個性ある「描写」を，それぞれの作品の最大の特色として絶賛した。たとえば「怪現状」では「知識階級の描写」，「老残遊記」では「科学的精神による描写」そして「官場現形記」においては「小官僚や佐雑の描写」である。ところが改稿三篇においてはこれらの描写に対する評価が後退し，かわって「腐朽した封建統治」や「主観主義で行動する官吏」に対する暴露などが，それぞれの作品の最大の価値のように書き改められた。なぜ，阿英はこのように書き改めたのか，理由は様々考えられよう。たとえば当時論争が表面化しようとしていた「社会主義リアリズム」に同調させるため，あるいは1954年末に王瑤が提出した「古典文学評価の再検討」が念頭にあったため等とも考えられる。しかし，この改稿三篇執筆の最大のそして直接の目

的は「胡適批判」に対処するために書かれたということである。いま，「老残遊記」を例にとって説明する。胡適は「老残遊記」を「～老残遊記在中國文學史上的最大貢獻却不在於作者的思想，而在於作者描寫風景人物的能力。……最擅長的是描寫的技術；無論寫人寫景，作者都不肯用套語爛調，總想鎔鑄新詞，作實地的描寫。在這一點上，這部書可算是前無古人了。」(「老残遊記叙」) と述べるようにその「描写」面で評価した。そして，「老残遊記」第二回から「王小玉唱大鼓」の件りを引用して，その例とした（「五十年来中国之文学」においても同様)。阿英は元来胡適とは政治的立場も文学的主張も異なっているが，前章で見たように「改訂版」においても商務印「初版」を改めることなく「胡適論小説，時有錯誤，但對老殘遊記的這一方面的評語，基本上還是洽當的。」と述べて，この部分の胡適の意見には重ねて賛意を表明し，更に胡適と同様に「老残遊記」第二回から「王小玉唱大鼓」の部分をそのまま引用した。ところが，1954年9月，李希凡・藍翎による兪平伯の紅楼夢研究批判が始まり，兪平伯の紅楼夢解釈が胡適のプラグマティズムに影響されていることが指摘され，その年の年末から翌年春にかけて次第に批判の矛先が胡適に移りつつあった。この「胡適批判」の影響もすでに言及したように「改訂版」には取り入れられたものの全面的なものではなかった。おそらく本格的な「胡適批判」が始まる頃にはすでに「改訂版」の改訂作業は終っていたのであろう[5]。阿英は「胡適批判」の成行きにおおいに不安を感じたが，批判はますます高まる一方であった。解放後の中国において批判闘争が開始されれば，その行き着くところは既に決しており，「胡適批判」のこのような高揚の中で胡適に同調するものは人民の敵として指弾される——といういままでの批判パターンを阿英は当然感じとったはずである。ゆえに，「改訂版」中の胡適の観点に同調した部分をすみやかに否定しなければならなくなった。そこで早速改稿に着手した，胡適が賞賛した「描写」については全面的に削除し，作品の評価を官僚批判に変えてしまった。そして，それは「老残遊記」のみに止まらず，「官場現形記」および「怪現状」にも及び，さらに胡適について言及した部分はすべて削除してしまったのである（但し，「官場現形記」については元来「改訂版」においては胡適に言及せず，逆に改稿では前章に引用したように言及している)。

これら改稿三篇が「胡適批判」に対処するために書かれたことは，阿英の改稿が「怪現状」「老残遊記」「官場現形記」の三作品についてのみ行われたことでも察せられる。胡適が晩清小説全般に言及したものとしては「五十年来中国文学」(1923，『申報・五十周年紀年刊』収) があるが，胡適はその第九節で晩清小説類を「南方的諷刺小説」として取り上げ，李伯元「官場現形記」，呉趼人「怪現状」「恨海」，劉鶚「老残遊記」(「官場現形記」「老残遊記」については上海亜東図書館本出版に際し長文の「叙」を書いている) に言及し絶賛するが，曽樸「孽海花」についてはふれていない[6]。阿英の改稿も晩清の四大作家の三作品については行われながら，曽樸「孽梅花」については改稿に至らず，上記三作に止まったのは，明らかに胡適のこの絶賛に抗して異議を述べるためであったからだ。ゆえに，胡適の言及しなかった作品「孽

海花」については改稿の必要性は認めなかったと思われる。(「改訂版」第三章の冒頭で阿英は「没有論到孽海花的，祇有胡適最近五十年來之中國文學」と述べている。)そして，阿英の改稿がこの三篇で終わったことは，「改訂版」の「跋」で「改本雖已着手，短期間恐難有成也」と述べているにもかかわらず，これら以外の作品部分について改稿の意図はなかったのではないかとも推測される。

さて，阿英は改稿Cにおいて「改訂版」では，まったく触れなかった胡適にかなりのスペースを割いて言及し，わざわざ批判を展開したのであろうか。AやBに倣うならば，当然Cにおいても「改訂版」のように触れる必要はなく無視すればよかったのではないか。

そこで推測ではあるが，該論Cは1955年に執筆されたが，執筆当時には発表されず，阿英の死後『小説三談』に収められたものが初出ではないかと思われる。——たとえ全面的に胡適を批判した文を劈頭に掲げたとしても，胡適について言及することは，その批判の最中においてはかなり危険であり，かつ過去に部分的にせよ胡適に同調した身としてはなおさらである。そこでA・Bについては発表したが，Cについてはついに発表に到らなかったのではないかと考えられるのである。

次に，改稿Bが執筆から7年も経った1962年に発表された理由は，次のように推測される。1955年，張畢来が「『老残遊記』的反動性和胡適在『老残遊記』評価中所表現的反動政治立場」(1955．2『人民文学』第64期)及び「略談『老残遊記』」(1955．3『文芸学習』12)という胡適批判がらみの劉鶚批判論文を発表した。これに端を発して念如，労洪，時萌等が，賛否両論の意見を相次いで発表し，いわゆる「老残遊記論争」が1957年初め頃まで続いた。すでにBを書き上げていた阿英は，論争の推移を静観し，波が次第に静まり，厳薇青の「関於『老残遊記』的作者劉鶚」(1962．2『文史哲』双月刊1962—3)や魏紹昌の『老残遊記資料』(1962．4中華書局)など客観的な研究が発表，出版されるような状況になってきたことを踏まえてBを発表したと推測される。しかし，その後に再び尺松の「談劉鶚的『老残遊記』」(1964．6．28『光明日報』「文学遺産」467)及び「不能為劉鶚的売国言行辨護——与厳薇青先生商榷」(1964．12『文史哲』双月刊1964—6)が出て，引き続き李永先「為什麼要為漢奸辨護——読『関於「老残遊記」的作者劉鶚』」(1965．2『文史哲』双月刊1965—1)や王俊年「『老残遊記』是一部什麼様的作品」などが発表されて「老残遊記論争」は再燃した。これは1955年に書き上げたCを発表する気力をも奪ってしまったのではないだろうか。

四

以上，阿英の『晩清小説史』は商務印書館刊の初版以来，作家出版社「改訂版」，そして本稿で述べた改稿三篇というように書き換えられて来た。そして書き換えのたびに，晩清小説そのものに対する阿英の解釈はたいへん幅のせまいものになってしまった。それは，初版出版からのかなりの年月を経たため阿英個人の観点や解釈が変化したということに起因してい

る部分もあろうが，結局は中華人民共和国成立以後の政治的情況に左右された点のほうがはるかに大きい。文学作品を批評する場合には，異なった観点から新たな解釈を下すことは当然のことである。しかし，その中には，個人的なあるいは時代的な偏向を乗り越えた普遍性がなくてはならない。そして，この改稿三篇からはそのよう傾向は見て取ることができないし，昨今の中国の文学情況に照してもあまり意味のないものになっているのではないだろうか。阿英（あるいは中国の知識人）が解放以後の政治の波にどのように翻弄されたかを研究するのならばともかく，晩清小説を研究するための参考資料としては，この改稿三篇はほとんど意味がないもののように感じる。

『晩清小説史』は「初版」出版以来，すでに半世紀余りを経ている。その間に研究はおおいに進歩し，また新たな資料も続々と発見された。しかし，現在まで新たな「晩清小説史」は出版されていない。阿英の『晩清小説史』に代るものがない現在，「晩清小説史」を読もうとするならば，この半世紀余りの研究成果を念頭に置きながら（さらに阿英の数々の錯誤を正しながら読まなければならぬが），商務印書館「初版」で読むべきだと確信する。

注

1）これらの改訂について詳しくは，拙稿「阿英『晩清小説史』の改訂」（1989．12．1清末小説研究会『清末小説』12）を参照。

2）「改訂版」末尾に附された阿英の「跋」にも「～故現就原本略加刪節，作為資料重印，以供需要。改本雖已着手，短期間恐難有成也」とあり，「改訂版」の改稿に着手していたことがわかる。注⑥も参照。

3）この点について，阿英は全面的に呉趼人の愛国精神を肯定しているわけではなく，時代的な制約から「只是由于他還是个君権思想者，所以他雖表揚愛国及有正義感的人，但他終于不能看徹真正人民的力量～」と注釈を加えている。そして，阿英のこうした見解はまた阿英自身が生きた時代の制約から生れでた見解である。

4）第二の荘宮保の記述について，これは「老残遊記」第十四回に基づいて阿英は述べているのだが，その内容紹介には誤りがある。ここに登場する宮保は「世故に通じない君子」かもしれないが，「簡単にある観察の建議を信じて賈譲の『治河策』という古い方法を用い，実情を考えずに黄河の治水工事をした」りはしていない。「ある観察」とは史釣甫という人物で，彼が宮保に『治河策』を示し，これを宮保が実行すれば「賈譲は二千年後に一知己を得」て，宮保の「功名は竹帛に垂れ万世不朽である」といったのである。宮保はその進言を聞いて眉をひそめて反対している。阿英の記述は事実と逆なのである。したがって，宮保に対する「還是只憑主観願望，不研究客観実際情況的人」という評価は当を得ないし，第二の「主要環節」は成立しなくなる。いまは，阿英がBにおいて「老残遊記」をどのように評したかが問題であるから，本稿本文ではそのままにした。なお，「老残遊記」第十四回には，ただ「宮保」と職名があるのみで「荘宮保」とはない。

5）この「主観主義」についての批判は兪平伯に対する批判にもとづく。つまり兪平伯が『紅楼夢研究』の中で，文学批評には客観的規準などはなく，主観的な好悪による云々と述べるが，それへに対する批判を援用したのである。（君島久子・立間祥介・檜山久雄「『紅楼夢』批判とその展開」（1955．4．30『北斗』第4

号による）

6）「改訂版」末尾の阿英の「跋」の最後には「一九五五年八月」とある。それならば，すでに全面的に「胡適批判」が行われている時期に「改訂版」は稿了したことになる。出版年月は「跋」と同様の1955年8月であり，いくら迅速に出版されたとしても，中国の出版事情から考えて「跋」の期日と同月に出版されたとは考えにくい。もし「跋」の日付がほんとうならば，新たに改稿を書く必要はなく，改稿を「改訂版」の中に組込むだけの時間的余裕はあったはずである。したがって，「胡適批判」が本格的になる以前に「改訂版」の組版はすでに出来上がっており，阿英が全面的に手を加える余地はなくなっており，そのために「跋」の末尾に「～改本雖已着手，短期官恐難有成也」とことわり書きを記し，すぐに「改稿」に着手したのではないだろうか。ゆえに「跋」はその日付から，「胡適批判」（だけではないと思うが）を睨んで慌ただしく書かれたとも解せる。

7）胡適は「文学改良芻議」（1917．1『新青年』2－5）の中でも「其足与世界第一流文学比較而無愧色物」として，この三人の名前をあげている。

8）以上の外に「改訂版」で阿英が胡適に言及する個所は第一章，第十二章，第十三章，第十四章であるが，第十二章の「九命寄寃」に関する引用以外は，すべて胡適の見解に異義を唱えている。

（引用文中，商務印「初版」，「改訂版」は，繁体字，その他は常用漢字を使用，また原文引用には邦訳を附していたが，紙幅の関係ですべて省いた。）